プロイセンの近代化

エルベ以東は、西ヨーロッパに穀物を輸出し、工業製品を輸入するという、まるで植民地のような役割をはたし、その後進性に加えて三十年戦争の惨禍のため国家形成がなかなか進まなかったが、ここにプロイセンの台頭を見たことは重要であり、プロイセンはヨーロッパ主権国家体制の一翼をになう存在に成長した。

「【1:　　】」（土地貴族）が**農場領主制**（グーツヘルシャフト）を行い、農民は時代遅れの苛酷な賦役労働（ふえきろうどう）に苦しんでいたが、三十年戦争後、プロイセンは著しく発展した。次の**親子**連続３代のプロイセン国王に注目しよう。

フリードリヒ１世 ※1 位1701-13 → **フリードリヒ=ヴィルヘルム１世** 位1713-40 → **フリードリヒ２世** 位1740-86
王国となる　　「**兵隊王**」の異名を持つ。　　（啓蒙専制君主）「**大王**」

※1 ブランデンブルク選帝侯としてはフリードリヒ３世

1）【2:　　】位1701-13　スペイン継承戦争に神聖ローマ帝国側で参戦、1701年王国となる。№108参照

［**一方、オーストリアでは**］　オーストリアは、スペイン継承戦争に参戦。
ラシュタット条約(1714)でスペイン領ネーデルラントを得た。

2）【3:　　】位1713-40　　絶対王政の基礎を築く
ユンカーを将校に登用、強力な常備軍を築き「兵隊王」の異名を持ち、官僚制度の整備、司法改革も行い軍国主義的な絶対王政を作り上げた。無骨で芸術を解さず、息子（後の【4】）と対立。

3）プロイセンは【4:　　】位1740-86 の時、ヨーロッパの強国になった！（後述）
【4】は父の【3】とは異なり、学問と芸術に明るく、ロココ的宮廷人であった。

フリードリヒ２世（大王）位1740-86 の業績　　大王の有名な言葉：「君主は国家第一の下僕なり」

1）即位後ただちにフリードリヒ２世（大王）は啓蒙主義的な改革を活発に始め、拷問の廃止、貧民への種籾貸与、【5:　　】、オペラ劇場の建設、検閲の廃止などが実行された。【5】とは、支配的な宗教以外の宗教の信者にも宗教の自由を保障したもので、17世紀後半からナントの王令廃止で流入した多数のユグノーも信教の自由を得た。オーストリアのヨーゼフ２世も1781年に出している。

2）これも即位の年（1740）であるが、大王はオーストリアの【6:　　】がハプスブルク家の全領土を継承したことに異議を唱え、資源豊かな【7:　　】を占拠、**フランス王や**自らの継承を主張するバイエルン公と組んでオーストリアと戦った。これが、【8:　　】1740-48 である。【9:　　】（1748）で【7】を確保したことで、プロイセンは強国の仲間入りを果たした。【7】の領有については№108で詳述した。

［**一方、オーストリアでは**］　**マリア=テレジア**がオーストリア・ハプスブルク家を継承するに至った経過は**№104**で述べた。カール６世の死によって、マリア=テレジア 位1740-80 が即位したのは、大王の即位と同じ1740年だった。【8】がおこされ、マリア=テレジアはフランスを破ったが、この戦争終結時の【9】で、プロイセンに豊かな鉱工業地帯の【7】を奪われてしまった。【7】を奪われたマリア=テレジアは、1756年、それまで対立してきた**フランス・ロシアと同盟**を結び、【7】の奪回をめざした。これを【10:　　】と言う。1770年、彼女は同盟の証に自分の14歳の娘、【11:　　】をフランスの**ルイ16世**（即位は1774年）に嫁がせた。マリア=テレジアも**啓蒙専制君主**である。フランスと同盟する際にルイ15世の愛人ポンパドゥール婦人（大王に反感を持つ）との交友が役立ったといわれる。

3）重商主義政策‥‥産業を育成し、軍備の充実をはかった。

4）プロイセン王国成立以前から、ユンカー（地主貴族）が農民の賦役労働を用いたグーツヘルシャフト（農場領主制）を展開するという著しい後進性を持った社会であった。大王はこの後進性をどうしたのだろうか。大王は、**ユンカー勢力と協調して**国力を強める道を選択した。ユンカーは軍部と官僚の中核をしめ、その勢力は20世紀まで存続した。

5）【12:　　】らの啓蒙思想家を宮廷に招き、【13:　　】の一人だった。サンスーシ宮殿には「ヴォルテールの間」があった。一般に、**啓蒙専制君主とは、啓蒙主義的政策を実施しつつ専制政治を行う君主**である。**近代化の遅れた国における、富国強兵をめざす君主の上からの改革である。**プロイセンでは上記1）2）3)を実行するために、旧式なものを4)の条件下で批判する道具として啓蒙思想を用いた。他に典型的な啓蒙専制君主として、オーストリアのヨーゼフ２世、ロシアのエカチェリーナ２世。

6）寒冷でやせた土地でも生育するジャガイモの栽培を奨励し、それまで休耕地となっていた土地にジャガイモや飼料作物（クローバーなど）の栽培を奨めた。ジャガイモ栽培は多くのドイツ人を飢えから救ったと言われ、ドイツ料理によく使われる食材の一つにまでなった。

7）外交革命で孤立したプロイセンは、<u>イギリスの援助を受けて</u>、オーストリア陣営に先制攻撃をかけた。
これが、【14:　　】1756-63である。プロイセンが始めた！　敵は**オーストリア＋フランス**、スペイン、ロシアなど。はじめは大変苦戦したが、1762年には奇跡的にロシアが脱落し、植民地における戦争でイギリスがフランスに勝ったことなどから窮地を脱した。1763年、【15:　　】でオーストリアと単独講和。結局【7】の領有は確保した。イギリス・フランス・スペイン間の講和条約は、同年の**パリ条約**。№121参照。

［**一方、オーストリアでは**］　プロイセンに敗れたオーストリアでは、マリア=テレジアが改革を始めた。 その息子、【16:　　】も**啓蒙専制君主**として中央集権化に努力した。【16】は1765～80年はマリア=テレジアとの共同統治、1780～90は親政である。なお、ロシアのエカチェリーナ２世も**啓蒙専制君主**である。

8）1772年、大王は第１回ポーランド分割に加わった。２回目、３回目はフリードリヒ=ヴィルヘルム２世

［一方、オーストリアでは］　同年、ヨーゼフ２世も第１回ポーランド分割に加わった。1781年、**ヨーゼフ２世**は①宗教寛容令を布告、非カトリック教徒にも信仰の自由を許容。彼は、②農奴解放令も布告し、修道院の解散、貴族の免税特権の廃止などの改革に着手した。農民の保護、商工業の育成等も行った。しかし、急激な③中央集権化はハンガリー人など諸民族の反発を招き、斬新な改革も貴族層の強い反対を受け、多くの改革はその死とともに撤回された。

①②③とも2013早稲田

オーストリアはスラブ諸民族を含む複合民族国家である。国民意識は育ちにくい。当時の支配領域には、**ドイツ人・マジャール人（＝ハンガリー）・チェック人（ベーメン）が住み、北イタリア・ベルギー**なども含んでいたから、ヨーゼフ２世の画一的改革は反感をかった。

アウグスライヒによりオーストリア=ハンガリー(二重)帝国 1867-1918 という形になるのは約１世紀後である。

ロシア帝国のバルト海支配

1）ロマノフ朝第２代目のアレクセイ３世 位1645-76 の治世下、ドン=コサックの首領【17:　　】に率いられた農民反乱 1670-71 が起きた。【17】は1671年、残酷に処刑され、農民戦争は終わった。約100年後のエカチェリーナ２世治下、ほぼ同じ地域で起きたプガチョフの反乱 1773-75 も一緒に覚えておこう。南ロシアのドン川、ヴォルガ川中下流域。

復活・強化された農奴制の下で農民は重い負担にあえいでいた。厳しい賦役労働をのがれるため、村を捨てて流民になった者たちが、当時は辺境だった南ロシアのドン川、ヴォルガ川中下流域に集まり、生きるために、牧畜、漁業、狩猟、交易、略奪などを行う騎馬戦士集団となっていった。彼らをドン=コサック（あるいはコサック）という。自由民だった彼らはロシアの圧政に抗してしばしば反乱を起こした。他方で、コサックの人々の中には、ロシア帝国の辺境警備、革命運動の抑圧、シベリア進出などに、ロシア帝国に雇われて従事する場合もあった。

≪参考≫ ロシア民謡「**ステンカラージン**」　歌詞の要旨：ペルシアに侵攻したステンカ=ラージンは「ペルシアの姫」を捕らえて睦まじくした。ドン=コサックの掟は正式に結婚していない男女の関係を許さない。掟やぶりは首長でも許されない。部下たちに「そしり」がわき、ステンカ=ラージンは「ペルシアの姫」を抱き上げ「雄々しく捨てぬ」（たぶんヴォルガ河に投げ捨てた）という残酷な展開となる。

2）ロマノフ朝第５代目の【18:　　】（大帝）位1682-1725 は、オランダやイギリスなどを視察し、徹底的な西欧化政策を推進した。実はそれまで、ロマノフ朝はヨーロッパではあまり尊重されておらず、ロシアも帝国とは認められていなかった。以下は大帝と呼ばれた【18】の業績。

①工業の育成、官僚制の整備を行う。貴族たちにも長いあごひげを切らせた。絵画が残っている。

②17世紀末、不凍港を求めてオスマン帝国と戦い【19:　　】周辺地域を占領した。

③シベリア経営も進め、1689年、清（康熙帝）と【20:　　】を締結、スタノヴォイ山脈（外興安嶺）とアルグン川を結ぶ線に国境を画定した。

清（雍正帝）とのキャフタ条約（1727年）はピョートル２世(位1727-30）の時、アラスカ領有は1741年である。

④1697年、西欧使節団を派遣した。ピョートル１世自らも変名を用いて参加した。

⑤バルト海を支配していた軍事大国スウェーデンで、年少のカール12世 位1697-1718 が即位すると、不凍港を求め、ポーランド、デンマークと結んで、スウェーデンと戦い勝利し、バルト海東岸を得た。これが、【21:　　】1700-21 であり、これを境にスウェーデンは衰退した。北方戦争に勝利した1721年、ピョートル１世は古代ローマ帝国由来の称号インペラートル（皇帝）を自称して、帝国となったことを宣言、列国も事実上これを認めた。これより1917年の三月革命までがロシア帝国 1721-1917 である。敗れたスウェーデンは19世紀初めには憲法が制定され、やがて責任内閣制が確立した。

⑥北方戦争でスウェーデンから奪ったバルト海東岸の新しい領土に、1703年、サンクトペテルブルク（あるいは単にペテルブルク）の建設に着手、1712年ここを首都とし、「西欧への窓」と位置づけた。この都市は、1914～24年は「ペトログラード」、1924～91年は「レニングラード」とよばれ、現在、また「ペテルブルク」に戻った。

3）女帝【22:　　】位1762-96 は、ピョートル３世の妃でドイツ人だったが、クーデターで皇帝となった。

①ピョートル１世の国内政策を受け継ぎ、農奴制を強化し、また西欧への接近を続けた。

②ピョートル１世の対外政策を受け継ぎ、２度にわたってオスマン帝国と戦い（この戦争には固有の名称はない）、1774年、【23:　　】で黒海北岸を領有、1783年、クリム=ハン国を併合し黒海の制海権を得た。1792年、ヤシ条約でクリミア半島を獲得した。

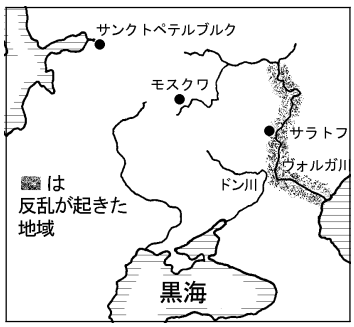
③既に1741年に領有したアラスカに、ベーリング海峡を越えて進出。

④オホーツク海に進出、【24:　　】を1792年には根室に、1793年には函館に派遣。漂流民を送還、通商をもとめた。**大黒屋光太夫**を帰還させたのは1792年の根室来航の時である。

ラクスマンは父子ともに有名でここでは息子の方のラクスマンである。

⑤【25:　　】の中心的役割をはたした。1772、93、95年の３回ともエカチェリーナ２世の時代。

⑥ヴォルテールと文通するほどの【26:　　】で、フランス風の啓蒙思想に基づいて内政改革を行ったが、【27:　　】※ 1773-75 やフランス革命の影響でしだいに反動化し、貴族に特権を認め、農民を弾圧して農奴制を強化するに至った。



※プガチョフの農民反乱は、ドン=コサック（軍団）の息子として生まれたエメリヤン=プガチョフに率いられたロシア史上最大の農民反乱である。オスマン帝国との戦いで疲弊した農民の不満を背景に、プガチョフは「自分はピョートル３世である」と僭称して、農奴制からの解放を宣言した。最盛時５万人が参加！カザニ、サラトフを占領して、モスクワへの進撃をめざした。ロシア帝国政府は一時ホントに危うかったが、反乱は1774年8月にヴォルガ川下流域で撃破された。